

## カザフスタン ― 草原の村でのフィールドワーク ―

藤本透子

カザフスタン北部の農村で、この報告を書いている。村の周りはサルアルカ（黄色い背中）とよばれる広い草原で、春には淡い緑に若草が萌え、夏には黄色く枯れて、冬にはいちめんの雪になる。遠くには青い山並みがなだらかに見えて美しい。この村で文化人類学の調査をはじめ、もうじき2年になる。農村部でフィールドワークする際の問題点について、体験を交えながら書きたい。

### 調査地の選定と資料

調査地を選定するにあたっては、留学先である東洋学研究所の指導教官の紹介によって、いくつかの農村をまわった。村の人たちと直接交渉した結果、今いるパブロダル州の村で調査をさせてもらうことになった。

フィールドワークを始める際の基礎的な資料としては、4年毎の国勢調査の結果を州別にまとめたものが役に立つ。地区ごとの人口、民族構成、教育、人口流出・流入などの情報が得られ、地域のおおまかな特徴を把握することができる。アルマトゥ市にある国営統計局で入手できる。

調査地の地図としては、岐阜県図書館の世界分布図センターにある、ソ連時代の20万分の1の地図が参考になる。地名が詳しく、村、家畜飼育拠点、牧草地用の水路までも示されている。すこし前のことになるが、アルマトゥ市アバイ通り沿いのGEOという地図専門店で、ソ連時代の詳細な地図（おそらく軍用地図）も購入できた。ただし、最近は行っていないので、確認が必要。

カザフスタンの調査地近郊で出版された文献も、フィールドデータを補う資料として利用価値がある。私はパブロダル国立大学が出版したパブロダル州事典 (*Pavlodarskoe priirtysh'e: entsiklopediya*)、地域出身の歴史的人物のシリーズ本のいくつか、郷土史家による系譜の研究などを利用している。

### 外国人登録

次に、神経をすり減らされることの多い、手続き上の問題について。私は1999年からなんとか農村部に入り、その度に外国人登録をめぐるトラブルにあってきた。外

国人登録は、カザフスタンに到着後、5日以内に招待機関がすることになっている。登録に当たって *migratsionnaya kartochka* というカードが発行される。このカードは基本的に、カザフスタン全土に通用するものではなくである。しかし、カードには居住地の住所が書かれる。このため、招待機関のある場所と長期滞在して調査する場所が異なっている場合、しばしば問題となる。

例えば私は、調査地のある州の役場に知事宛のレターを持って行き、その後に村に入った。しかし、村に来た地区警察には、州都での登録が必要と言われた。州都まで戻ると、登録は必要ないと判明した。また別のときには、アルマトゥで外国人登録をした後、調査地のある州で登録更新をしようとしたところ、一週間以上待たされた末に、アルマトゥ州での登録を抹消したという書類を要求された。

外国人登録に関する規則はしばしば変更され、現地での警察の対応もまちまちで、こうすればよいと一般的に言うことは難しい。しかし、調査地に入るにあたって、州、地区、村の各レベルで行政と警察の両方に連絡しておくことが、問題になるのをできるかぎり防ぐ手立てだといえる。行政のみに連絡しても、外国人登録を直接担当する警察には連絡が届かないことが多い。

この教訓を踏まえて、2004年にアルマトゥ市で登録更新した際には、「パプロダル州に行くことを許可する」という書類を外国人登録所で作成してもらった。その後、州、地区、村の行政と警察に挨拶してから調査地に戻った。その際、地区の警察には、パスポート（ビザと外国人登録）の提示と、証明写真の提出を求められた。村の警察官には、パプロダル州からほかの州に行く際、パプロダル州に戻った際には逐一報告するよう言われている。農村部では外国人が非常に少ないため、私の存在は目立つようである。州警察が村担当の警察官とともに家を訪問してきたため、食事とお茶でもてなしたこともある。

### 電話の設置

それ以外に、調査地で最も問題になったのは、電話である。私がいる村は人口約750人で、約10世帯にのみ電話がある。副地区長に、私の住み込み先に電話を設置してもらえるよう依頼したが、なかなか設置されなかった。地区中心から約90km離れた小さな村のためである。電話番号の分配が極端に少ない上に、電話局と懇意の村人から先に自宅に電話を引いてしまう。半年後、地区長に直訴してようやく設置された。あまりに当然のことだが、ほかに問題が起きた場合のためにも、地区長に直接会っておくことは重要である。

ところで、電話を引いた際、電話局の人たちは、私が親しくしている村人の家の電

話線を切って私の所へ設置してしまった。これには困った。交渉の結果、その村人宅には別の電話が設置され、なんとか一件落着した。「一軒の家に電話を引くと、別の家の電話を取り外さなくてはならなくなる。それが、今のカザフスタンの状態だ」とその家の人が言ったことが印象に残る。

その後、私の滞在先に設置された電話を、たくさんの村人が利用するようになった。ソ連時代にはあった通話局が撤去された結果、街に電話するには、電話のある家について電話するしかない。電話に来る人と話すことは、村人と親しくなり、村の出来事を知る上で役に立っている。しかし、問題もある。村人の多くはツケで電話をする。そのため、月ごとの通話料の支払いに苦勞することになる。現金払いにするよう頼む、やや割高に通話料を要求するなど、滞在先の家の人たちと相談しつつ対策を講じるが、今もイタチごっこが続いている。街から、村人を呼んでくれるようにと電話がかかってくることも多い。この電話への呼び出しを通じて、村人の家をずいぶん覚えた。ただ、あまりに頻繁すぎるので、いまは電話の取次ぎの多くを滞在先の家の人に任せている。

いろいろと問題をかかえつつも、この電話を通して日本とメールのやり取りができ、この原稿を送ることもできる。

フィールドワークにとまなう問題は、地域やテーマによってもさまざまであろう。ここに書いたささやかな体験談が、農村部で調査される方の参考に少しでもなればと、切に願っている。

(京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程)